

数量詞句の前提性と統語構造についての一考察*

本 間 伸 輔

1. はじめに

本稿では、英語の数量詞に2種類の意味があり、その意味の種類によって名詞句内での位置が異なるという先行研究での分析を概観し、日本語における新たな証拠を指摘する。

2. 英語の数量詞の2つの意味

英語のmanyやsomeといった数量詞には、Milsark (1974, 1977)などの研究によって基本的に2種類の意味があることが指摘されてきた。例えば、(1a)の名詞句many peopleには、「特定の人々の集団のうちの多くの人々」という、あらかじめ存在が想定された集合のうちの一部を表す意味と、このような集合の存在が想定されず、談話上初登場の多くの人々を表す意味とがある。

- (1) a. Many people were at the party.
b. Some unicorns entered.

情報の新旧という観点から言えば、前者はある特定の人々の集団の存在が想定されていることから旧情報を含んでおり、後者はそのような集合が想定されず、談話の中で初登場の人々を指すので、新情報を表すことになる。以上の意味的性質は(2)のようにまとめられる。本稿ではDiesing (1992)にならって、これらの意味を「前提的(presuppositional)解釈」および「非前提的(nonpresuppositional)解釈」と呼ぶことにする。¹

- (2) 前提的解釈 ある特定の集合の存在があらかじめ想定されており、そのうちの部分集合に含まれる成員の数を表す。
非前提的解釈 そのような集合の存在が想定されず、談話上初登場の成員の数を表す。

この2種類の意味は単に単語レベルの多義性とどまらず、文法との密接な関連性がある。例えば、前提的解釈のmany peopleはmány peopleのように数量詞の強勢が相対的に強くなるのに対して、非前提的解釈の場合は特に理由がない限り後続する名詞に比べて数量詞の強勢が弱くなることが指摘されている(Milsark (1974, 1977))。

さらに、Milsark (1974, 1977)は、there構文のbe動詞に後続する名詞句は非前提的解釈に限られることを指摘している。例えば、(3)においてmany peopleは、談話上初登場の人々を指す非前提的解釈は可能だが、ある人々の集合の中でパーティーに出席していた人が多いという前提的解釈をすることはできない。

- (3) There were many people at the party.

実際、唯一的に前提的解釈のみを表す形式であるmany of the peopleはthere構文に生起しない。

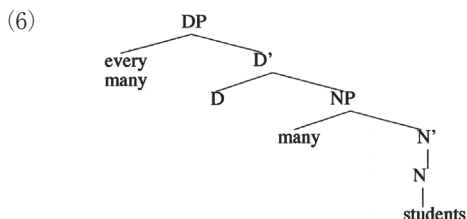
- (4) *There were many of the people at the party.

数量詞の中にはeveryやmostのように前提的解釈しか持たないものもある。例えばevery studentはある学生の集合のうちの全ての成員を指すものであり、most studentsは学生の集合のうちの大部分の学生を指すものである。これらは(5)のようにthere構文のbe動詞の後続位置に生起することができない(Milsark (1974, 1977))。

- (5) a. *There is every dog in the room.
b. *There are most books on the table.

3. 数量詞の2種類の位置

前セクションで見たMilsark(1974, 1977)の指摘は、数量詞の2種類の意味が単に単語レベルの多義性とどまらず、文法と密接に関わるものである可能性を示唆している。その後の生成統語論の研究では、Hudson(1989), Giusti(1991), Muromatsu(1998), Borer(2005)らによって、名詞句内での数量詞の位置が2カ所あり、everyやmostなどの数量詞は構造的に上位の位置に、manyやseveralなどの数量詞は上位の位置にも下位の位置にも現れるという分析がされてきた。例えばHudson(1989)では以下の2種類の位置が提案されている。²



さらにHudson(1989), Muromatsu(1998)では、この2種類の位置がセクション1で論じた2種類の解釈に対応するという分析が提示されている。(6)の構造を仮定するなら、DP指定部の位置(上位の位置)は前提的解釈の数量詞の位置、NP指定部の位置(下位の位置)は非前提的解釈を受ける数量詞の位置ということになる。everyやmostは前提的解釈しかないので、必ずDP指定部の位置、manyやsomeなどは解釈の種類によってDP指定部にもNP指定部にも現れることになる。

以上の構造的な位置と意味解釈との対応関係は、以下の事実によって確かめることができる。(7-9)で示したように、非前提的解釈を持つ数量詞の左側には、定冠詞theや指示詞these/those、所有格の名詞句や代名詞を置くことができるのに対し、前提的解釈のみの数量詞everyやmostの左側には置くことができない。³

- (7) a. the three stooges
b. the few volunteers
c. these several mistakes
d. the many medals (on the table)
e. the many people
- (Borer (2005: 140-141))
(Partee (1988), Muromatsu (1998))

- (8) a. *the every boy
 b. *the each boy
 c. *the all boys
 d. *the both boys
 e. *the any boy(s) (Borer (2005: 140-141))
- (9) a. my many students
 b. my three students (Homma (2011))

解釈に焦点を当てると、(7)、(9)の数量詞は非前提的解釈の[数量詞] + [名詞]の場合と同じ意味的働きをしていることがわかる。例えば(7e)において、manyは単に人々の数が多いことを表しているが、many peopleの前提的解釈の場合のように集合の中で大きな割合を占める人々を表しているのではない(Pardee (1988), Muromatsu (1998))。同様に、(9a)は、ある特定の学生集団、例えば話者が担任している学級の生徒全員を指しており、さらにmanyはその学級の中の生徒の数が多いことを表している。つまり、manyは単に生徒の数が多いことを表しているという点で、非前提的解釈のmanyと同様の働きをしている。話者の担任学級の中の大部分の学生、すなわち特定の集合のうちの部分集合を指すという解釈は(9a)にはない。

以上のように、数量詞の前に定冠詞や所有格名詞句があると数量詞の解釈が一つに限定されることがなかったが、もし数量詞の解釈の種類に関わらず構造的位置がすべて同じだと考えると、(7-9)の事実をうまく説明することができない。一方、(6)のように数量詞の構造的位置が2カ所あると仮定するならば、非前提的解釈の数量詞はtheよりも名詞に近い内側に生起するため(7)、(9)のように定冠詞や所有格名詞句の右側に生ずることができるが、前提的な解釈の数量詞は外側の位置に生じなければならないため、定冠詞や所有格名詞句の右側に現れることができないと説明できる。

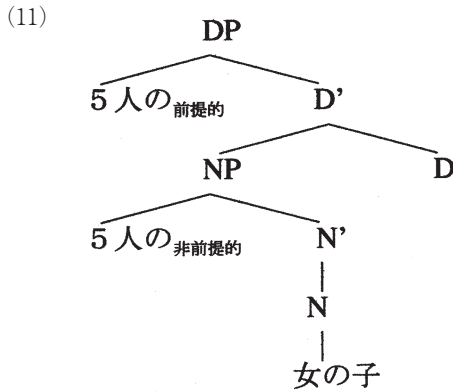
4. 日本語における数量詞の前提的・非前提的解釈と構造的位置

セクション2では、名詞句内に数量詞の位置が少なくとも2カ所あることが、(7-9)の事例によって分かった。しかしながら、(7-9)の事例では、manyが単なる数を表しており、非前提的解釈のmanyと同じ働きをしていることは言えるものの、theやmyの働きによって名詞句全体が「すでに存在が分かっている特定の集合」を指す、すなわち一種の前提的解釈になってしまうため、非前提的解釈のmanyが構造上内側にあるという主張を直接的に裏付けているわけではない。実際、(7-9)の場合のmanyを(1)の2つの読みのいずれでもない、第三の読みとして位置づける分析方法も提案されている(Pardee (1988), Muromatsu (1998))。

英語には(6)に示された構造的な違いと意味の対応を裏付けるこれ以上の証拠が見当たらないが、日本語には幾分確かな証拠がある。日本語における「5人の女の子が／を」のような[数量詞]—[名詞]—[格助詞]の連鎖は、英語と同様に前提的・非前提的解釈の両方が認められる。⁴

- (10) a. 5人の女の子が来た
 i) 前提的：あらかじめ存在が想定されている女の子の集合のうちの5人の女の子
 ii) 非前提的：談話上初出の5人の女の子
 b. 太郎は3台の車を目撃した
 i) 前提的：あらかじめ存在が想定されている車の集合のうちの3台の車
 ii) 非前提的：談話上初出の3台の車

日本語でも英語と同様に構造と意味との対応関係があるとすると、名詞句「5人の女の子」の数量詞「5人」には以下の2通りの構造的位置があることになる。⁵

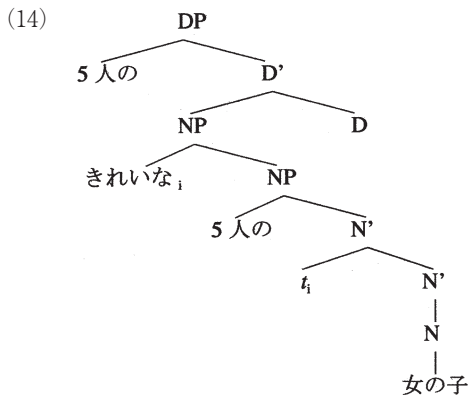


(11)の構造を示唆する証拠として次のような事例がある。

- (12) a. [5人のきれいな女の子が]来た
 b. [きれいな5人の女の子が]来た
- (13) a. 太郎は[3台の赤い車を]目撃した
 b. 太郎は[赤い3台の車を]目撃した

(12a), (13a)は[数量詞]－[形容詞／形容名詞]－[名詞]－[格助詞]の語順であり、一方(12b), (13b)では、形容名詞「きれいな」と形容詞「赤い」が数量詞の左に前置した語順になっている。⁶このうち(12a)の「5人のきれいな女の子」、(13a)の「3台の赤い車」は前提的にも非前提的にも解釈できるのに対し、(12b)の「きれいな5人の女の子」と(13b)の「赤い3台の車」には非前提的解釈しかない。例えば(12a)は「あらかじめ想定されたきれいな女の子の集合のうちの5人の女の子」という前提的解釈も、「談話上初出の5名のきれいな女の子」という非前提的解釈も可能であるのに対し、(12b)は後者の非前提的解釈のみが可能である。同様に(13a)は「(数台の)赤い車の集合のうちの3台」を表しうる(前提的解釈)のに対して、(13b)はそのような意味がなく初登場の3台の赤い車を表している(非前提的解釈)。

以上の違いは(11)のように前提的解釈と非前提的解釈に対応する2つの構造的位置を仮定することによって説明できる。形容詞／形容名詞の前置は、(14)のように基底位置であるNP内付加部の位置から移動しNPに付加すると仮定する。



(14)で示されるように、この移動によって「きれいな」はNP指定部を超えるため、NP指定部に位置する非前提的な「5人の」よりも左に移動することになるが、前提的な「5人の」はDP指定部にあるため、これより左に現れない。言い換えれば、「きれいな」の右側に現れることのできる数量詞はNP指定部にあるものに限られるが、NP指定部の数量詞は非前提的解釈を受けるため、[形容詞／形容名詞]－[数量詞]－[名詞]の語順が非前提的解釈になるのである。

以上の分析から、前提的解釈だけを持つ「すべての」、「ほとんどの」、「半数の」といった数量詞は、形容詞の前置を許さないことが予測される。これらの数量詞はDP指定部にしか現れないため、形容詞／形容名詞の移動がこれらを越えることがないからである。この予測は正しく、形容詞／形容名詞が前置している(15b)、(16b)は非文になる。

- (15) a. [すべての／ほとんどの／半数の／3分の1の]きれいな女の子が]来た
 b. *[きれいな]すべての／ほとんどの／半数の／3分の1の]女の子が]来た
 (16) a. 太郎は[すべての／ほとんどの／半数の／3分の1の]赤い車を]目撃した
 b. *太郎は[赤い]すべての／ほとんどの／半数の／3分の1の]車を]目撃した

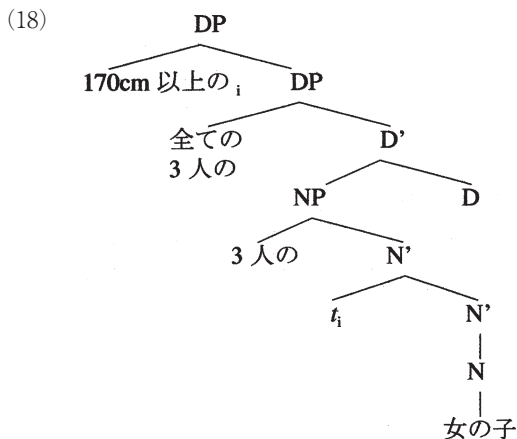
このように、前提的解釈と非前提的解釈の数量詞の構造的位置の違いが、日本語での数量詞と形容詞／形容名詞との位置関係と解釈の関係を考察することによって確かめられる。

以上の分析には一見反例となる現象がある。名詞＋「の」の形式をもつ名詞修飾語句は上述の数量詞の種類を問わず、数量詞の左側に生起できる。⁷

- (17) a. その芸能プロダクションは、170cm以上の{全ての／ほとんどの}女の子を誘った
 b. その芸能プロダクションは、170cm以上の3人の女の子を誘った

(17a)は前提的解釈のみの数量詞「全ての」、「ほとんどの」を含んでいるが、名詞修飾語句である「170cm以上の」が数量詞の左側に生起している。さらに、(17b)は「170cm以上の」が数量詞「3人の」の左側に生起しているが、この名詞句「170cm以上の3人の女の子を」は非前提的解釈のみならず、前提的解釈が可能である。すなわち、170cm以上の女の子の集合のうちの3人の女の子を指すと解釈できる。

本稿で議論してきたように、(17a)で「全ての」／「ほとんどの」がDP指定部に生起しているという分析が正しいとすると、名詞＋「の」は、上述の形容詞／形容名詞とは異なり、(18)のようにDP領域に移動していると分析できる。



形容詞や形容名詞と異なり、名詞+「の」にとってこの移動が可能である理由は形態的特徴に求めることができる。名詞+「の」は、「の」で終わっているという点で「3人の」や「全ての」などの数量詞と形態的な共通点がある。数量詞「3人の」や「全ての」が主要部Dによって認可されるものと考えられるならば、形態的に共通性のある名詞+「の」もDによって認可されDP領域への移動が可能になるものと考えられる。一方、形容詞と形容名詞は「の」を持たないため、Dによっては認可されず、DP領域への移動が阻まれる。

5. 結 語

本稿では、英語の名詞句内に数量詞の位置が2カ所あり、それぞれが前提的解釈と非前提的解釈に対応しているという先行研究での分析を概観し、この分析が日本語名詞句内の数量詞と形容詞／形容名詞との語順を巡る現象によって支持されることを見た。

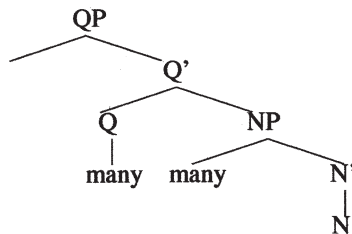
注

*本研究には、秋孝道氏、遠藤喜雄氏、加賀信広氏、竹沢幸一氏、土橋善仁氏、三井正孝氏より有益なコメントをいただいた。ここに感謝の意を表したい。本研究は、平成24-26年度科学研究費助成事業（基盤研究(C)、課題番号24520536）「英語・日本語数量詞句の統語構造、意味・談話的性質、作用域特性に関する理論的研究」（研究代表者 本間伸輔）、および平成24年度新潟大学人文社会・教育科学系研究支援経費研究プロジェクト（研究代表者 秋孝道）の助成を受けている。

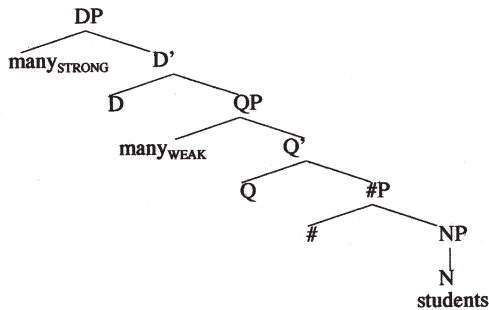
¹ この意味区分はMilsark(1974, 1977)の「強名詞句(strong NP)」／「弱名詞句(weak NP)」, Hudson(1989)の「量化詞的(quantificational)」／「基数詞的(cardinal)」およびEnç(1991)の「特定の(specific)」／「非特定の(nonspecific)」と概ね一致する。

² Giusti(1991), Borer(2005)が提案する構造は以下の通りである。なお、Giusti(1991)は意味的区別との対応関係には踏み込んでおらず、Borer(2005)の問題にする意味的区別は、本稿でのものとはやや異なるものである。

(i) a. Giusti (1991)



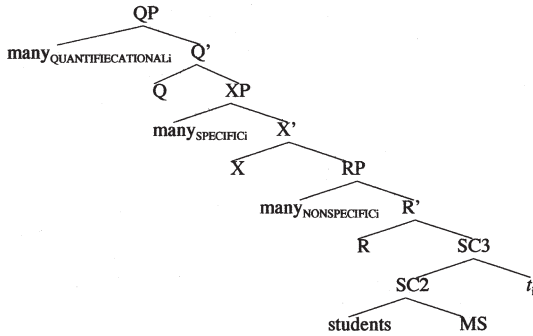
b. Borer (2005)



Muromatsu(1998)はPartee(1988)に従い、上位集合のうちの一部を指すが、割合ではなく絶対数を表す

というmanyの例を指摘し、本稿で扱う2種類に加え合計3種類の意味的区分を認め、それぞれに構造的位
置を充てている。

(ii) Muromatsu (1998) (「量化詞的(quantificational)」⇨前提的, 「特定の(specific)」,
「弱数量詞的(weak)」 = 非前提的)

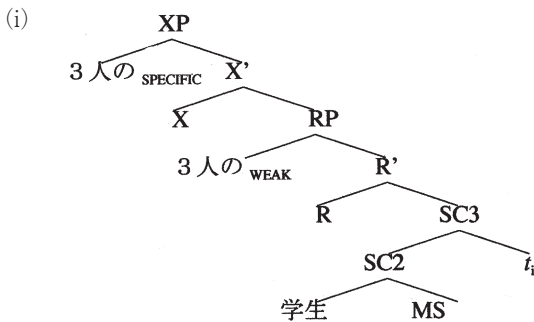


本稿では、Muromatsuの「特定の」解釈については扱わない。

³ Hudson(1989), Giusti(1991)も同様の事実を指摘している。また、Borer(2005)はthe little breadのlittle
などについても言及しているが、本稿では不可算名詞と共起するlittleなどの数量詞については扱わない。

⁴ 日本語では[数量詞]-[の]-[名詞]-[格助詞]の連鎖(QNC型)の他にも「女の子5人が/を」のよ
うな[名詞]-[数量詞]-[格助詞]の語順(NQC型)も、「女の子が/を5人」のような[名詞]-[格助詞]
-[数量詞]の語順(NCQ型)も可能である。このうちNQC型は前提的・非前提的解釈の両方が可能である
(Homma(in preparation))が、NCQ型は非前提的解釈のみに限られる(Homma et al. (1992), Muromatsu
(1998))。NQC型とNCQ型については本稿では扱わない。(「NQC型」, 「NCQ型」の用語は井上(1989)
による。)

⁵ Muromatsu(1998)は、日本語の[数量詞]-[の]についても解釈に応じた2種類の構造的位
置を提案し
ている。



日本語の数量詞の解釈と名詞句の統語構造については、Huang and Ochi(2010), Ochi(2012)も興味深い提
案をしている。

⁶ 「きれいな」などの「な」で終わる名詞修飾語句は伝統的には形容動詞と呼ばれているが、本稿では影山(1993)に従い、形容名詞と呼ぶことにする。

⁷ 竹沢幸一氏の指摘による。

引用文献

- Borer, Hagit (2005) *In Name Only*. Oxford University Press.
- Diesing, Molly (1992) *Indefinites*. MIT Press, Cambridge, MA.
- Enç, Mervet (1991) "The Semantics of Specificity," *Linguistic Inquiry* 22, 1-25.
- Giusti, Giuliana (1991) "The Categorical Status of Quantified Nominals," *Linguistische Berichte* 136, 438-454.
- Homma, Shinsuke (2011) "Scope and Syntactic Licensing of QPs" 『言語文化研究』第15号, 新潟大学.
- Homma, Shinsuke (in preparation) "Quantifier Scopepe, Presuppositionality and DP Structure in Japanese," 新潟大学.
- Homma, Shinsuke, Nobuhiro Kaga, Keiko Miyagawa, Kazue Takeda and Koichi Takezawa (1992) "Semantic Properties of the Floated Quantifier Construction in Japanese," *Proceedings of the 5th Summer Conference of Tokyo Linguistic Forum*, 15-28, Tokyo Linguistic Forum, Tokyo.
- Huang, C.-T. James and Masao Ochi (2010) "Classifiers and Nominal Structure: A Parametric Approach and Its Consequences," paper presented at GLOW-in-Asia VIII.
- Hudson, Wesley (1989) "Functional Categories and the Saturation of Noun Phrases," *Proceedings of the North Eastern Linguistic Society* 19, 207-222.
- 井上和子(編)(1989) 『日本文法小事典』大修館書店, 東京.
- 影山太郎(1993) 『文法と語形成』, ひつじ書房, 東京.
- Milsark, Gary L. (1974) *Existential Sentences in English*, Ph. D. diss., MIT.
- ____ (1977) "Towards the Explanation of Certain Peculiarities of Existential Sentences in English," *Linguistic Analysis* 3, 1 -29.
- Muromatsu, Keiko (1998) *On the Syntax of Classifiers*, Ph. D. diss., University of Maryland.
- Ochi, Masao (2012) "Numeral Classifiers, Plural/Collective Elements, and Nominal Ellipsis," *Nanzan Linguistics* 8, 89-107.
- Partee, Barbara (1988) "Many Quantifiers," *ESCOL* 1988, 383-402.